

幼児の一日の活動について(一)

—幼児のはじめてとりくむ活動



神 沢 良 輔

上平 多美・石坂 昭子
坂倉 哉子・原田 花子
上之郷 瑞代・森川 祥子

前号では、幼児の一日の活動について、幼児の要求ということを中心にして、一日の活動の教育的意義、幼児の生活リズムを含めて、一般的なことについてみてきた。

それで、この号では、実際の幼児の活動をもとに、幼児の一日の活動についてみていくことにする。

なお、ここで紹介するのは、昭和四十三年度の四日市市立泊山幼稚園での研究である。そのうちから、幼児の一日の活動について、幼児の自己をじゅうぶんに表現する活動についての観察を中心にみていくことにする。

この観察では、幼児の一日の活動を「幼児のはじめてとりくむ活動」と、「幼児の一日の活動の変化」という二面からみているので、ここでもその順序に従ってみていくことにするが、この号

では、「幼児のはじめてとりくむ活動」についてみていくことにし、「幼児の一日の活動の変化」については次号にゆずることにする。

三、幼児のはじめてとりくむ活動

幼児が登園して、保育者とのふれあいをして、安定感をもってどのような活動にはじめてとりくみ、自己をじゅうぶんに表現しようとするか、この問題を保育者が知ることは、保育をするうえで、もっとも基本的なことであろう。前述の泊山幼稚園では、これらの活動について、一年間を通して、五回にわたって幼児の活動を観察し、その変化を調査した。

(1) 観察の手続き

そこで、まず、観察の手続きについてみていくことにしよう。

(i) 観察の手続きの概略

この研究では、観察の対象が、ふだんの保育の実践場面での幼児の活動であるので、観察のために、幼児の活動を制限するような状態になるのをできるだけ避け、自然の状態でそのまま幼児の活動を観察することにした。そのために、観察の方法は、いわゆる自然観察法によった。また、観察者は保育者がこれにあたった。

観察をした日については、特定の行事のある日や、幼児の生活のリズムの著しく変化することが予想される日はさけて、もっとも一般的な保育のなされる日を観察日として選んだ。

観察の時間は、全体の幼児たちの登園し終わる午前九時より、学級全体の活動がはじまるまでの、いわゆる「幼児がみずから選んで行なう活動」や「グループで行なう活動」をする時間を中心として、十時までの一時間二十分とした。このような時間を選んだのは、あくまでも観察の便宜のためである。

つまり、全体の幼児が登園してから観察した方が、登園してきた幼児から順序に観察するよりは、観察資料を整理して、統計的

に処理するには便利であり、しかも、実践者が観察者にならないければならないため、朝のひとりひとりの幼児とのふれあいは、観察時間に入れない方がじゅうぶんに行えるためなどである。また、十時二十分で観察を打ち切ったのも、このような時間であれば、平常の生活リズムを中心とする保育では、よほどのことがない限り、学級全体の活動をしない時刻であるからである。

しかし、資料を整理しているときに、このような観察時間のきめ方にはいろいろの問題を残していることに気づいたが、ここではそれにふれないことにする。

なお、観察の対象とした幼児は、五歳児一年保育児である。

(ii) 観察の項目

観察の項目は、大きく三つにわかれている。すなわち、①活動の種類と内容、②活動の持続時間、③集団の構成と大きさ、である。これらについて、もう少し具体的にみていこう。

① 活動の種類と内容

幼児の活動の種類と内容については、ひとりひとりの幼児がとりくんだひとつひとつの活動について、どのようであったか、具体的にその内容を記述する。そして、一応、その活動の内容にみあった「活動の名称」をつけておく。これは活動の種類というわけにはいかないが、あとで内容とみくらべて種類に分類するとき

の、たいせつな手がかりになる。また、同じ活動でも、幼児の発達に応じて内容が変化するので、それに応じうるだけの活動にしているの内容を記述しておく必要がある。この活動の種類と内容は、一日の活動のすべてについて記録される。それにより一日の活動の変化がわかる。

② 活動の持続時間

そして、ひとりひとりの幼児のひとつひとつの活動について、幼児の興味の高さや集中力をみる指標として、ひとつひとつの活動がどれだけの時間続いたかについてみていく必要がある。それによって、どのような活動が、一日の活動の流れの中で、また、もっと長期にわたる活動の発達の中で、それぞれの活動が幼児にとって、どのような誘意性や教育的意義と価値をもっているかということについての、ひとつの重要な側面をみつけたことになるであろう。

③ 集団の構成と大きさ

そして、ひとりひとりの幼児の、ひとつひとつの活動は、そのときにおけるその幼児といっしょに活動している他の幼児との関係の中においても成立している。しかも、大部分の場合ひとりひとりの幼児は、実際には他の幼児とともに活動している場合がほとんどである。そのため、ひとりひとりの幼児の活動が、「だれ」とともになされたか、また、その活動には、どれだけの幼児

が参加したかということを理解しておくことは、活動の持続時間とともに、もうひとつの幼児の活動を支えている重要な側面を示すことになる。

また、ひとりひとりの幼児が「だれ」とともに活動したかということを連続して記録しておくこと、幼児の交友関係と活動との関係について明らかにすることができるとともに、幼児の活動の交友関係からみた問題点も指摘することができよう。

(iii) 観察の方法

観察についての実際の方法は、午前九時以降における幼児の活動を、前述の「観察の項目」に従って、それぞれのコーナーで活動している幼児、室外で活動している幼児など、全員について、ひとりひとりの幼児の活動している場面を中心に記録していく。記録用紙は、別に型式をきめなかったが、十分を単位として、新しい用紙にかえて記述する、いわゆる長時間見本法によった。

(vi) 観察回数

観察回数は、できるだけ多くすることの方が、少ないよりはよいであろう。けれども、観察や結果の処理のための労力や時間ということを考えると、いちがいに多いのがよいというわけにはいかないだろう。いうまでもなく、最小の労力で最大の効果をねら

うということがいちばんよいであろうが、いずれにしても、保育実践者が観察者であるという現場での研究では、研究そのものはうまくいったが、そのために実践がだめになったというのでは、研究の意義もなくなってこよう。だから、このことはとくにたいせつである。

そこで、この研究では、幼児の活動の変化や発達が、観察によってもある程度はつきりする時期を選んで観察するということを原則にして、実際には、二ヶ月ごとに観察することにした。

そして、実際に観察を実施した日は以下のようになった。

第一回 昭和四十三年五月九日

第二回 昭和四十三年七月九日

第三回 昭和四十三年十月九日

第四回 昭和四十三年十二月十八日

第五回 昭和四十四年二月二十五日

しかし、この観察回数については、あとで結果を検討してみたとき、もう少し間隔をつめた方が、もっと詳しい点についてみていくことができるのではなかったかという結論になった。

(2) 幼児のはじめてとりくんだ活動の種類と

その持続時間

この観察の結果について、まず、『幼児のはじめてとりくんだ

活動の種類とその持続時間』についてみていくことにしよう。

そこで、活動の種類ごとに、それぞれの活動に参加した幼児と集団の大きさ、持続時間を示すと第一表のようになる。なお、ここに示した結果は、便宜上一学級の結果である。この表をまとめるために、幼児の活動の種類についての分析をしたが、一応、大きく以下に示す八種類に分けた。すなわち、

A リズミカルな集団あそび

B 運動遊具による活動

C 構成的な素材による活動

D 可塑的な素材による活動

E ごっこ(役割あそびも含む)

F 絵画製作的な活動

G その他の活動

H ひとのあそびをみている活動

なお、これらの活動の種類は、観察の結果をわかりやすくするための分類であり、この分類がもっとも妥当なものであるとは必ずしもいえない。けれども、この分類は、実際の保育を考えるうえからみて、そのために使用しやすいことを念頭においてしたものである。なお、具体的な幼児の活動は、第一表のそれぞれの活動の分類のあとに示してあるので、それを参考に見ていただきたい。

第1表 幼児がはじめてとりくんだ活動の種類、集団の大きさ、持続時間

活動の種類		月		5		7		10		12		2	
		集団の大きさ	持続時間	集団の大きさ	持続時間	集団の大きさ	持続時間	集団の大きさ	持続時間	集団の大きさ	持続時間	集団の大きさ	持続時間
A リズムカルな 集団あそび	かごめかごめ たかたかとうぼん	2 (4)	10							1 (3)	40		
	計	2 (4)								1 (3)			
B 運動遊具によ る活動	マ 雲 鉄	5 (0)	30					0 (5) 3 (0) 2 (5)	20 20 20	4 (0)	20		
	計	5 (0)				5 (10)		4 (0)					
C 構成的素材に よる活動	つみ木 ブロック レールセット	3 (0)	10	9 (0) 6 (2)	20 20~60	3 (0)	20~80			3 (0)	20~40		
	計	3 (0)	10	15 (2)		3 (0)		4 (0)			40		
D 可塑的素材 による活動	砂 あ そ び ね ん ど	1 (4)	30~70	1 (2) 1 (4)	80 40~60							2 (0)	20
	計	1 (4)		2 (6)								2 (0)	
E ごっこ (役割あそ びも含む)	ぬいぐるみであそぶ ましましごっこ 舟店お家	0 (1) 0 (2) 2 (0)	10 60 30					3 (1) 0 (2)	20 80			0 (3)	40
	計	2 (3)				3 (3)		0 (3)					
F 絵画製作 的な活動	絵花をかくくり 魚をつつくり かクリスマス製作			0 (2) 0 (9)	60 20~40	3 (0)	20						
	計			0 (11)		3 (7)	20~60	2 (8)	20~80			1 (1)	
G その他の活動	①絵本 ②トラン ③こまわ ④レコードをき ⑤合奏劇あそび	0 (3)	30							5 (0)	20~40	0 (3) 8 (0)	20~40 20
H	ひとのあそびを みている	2 (3)	10~20	0 (1)	20	1 (0)	20						
人 数		15 (17)		17 (20)		15 (20)		16 (16)		17 (18)			

註 () 内は女兒を示す

では、この表から、幼児のはじめてとりくむ活動について、幼児の発達を中心にしてみていくことにしよう。

(i) 情緒の安定のために、手近なものであそぶ
(五月)

この観察においては、四月の資料がないのが残念であるが、幼児のはじめてとりくむ活動において、五月が他の月に比して、きわめて特徴的であることがわかる。

① つまり、五月では、ある活動をとくに選んでするというのではなく、登園直後の情緒を安定化させるために、一般的にみて、手近にあるものを使って活動するという傾向が強い。

② それは、「ひとのあそびをみている幼児」が五人もいることからもうかがえよう。これらの幼児たちの中には、ひとのあそびをぼんやりみている、いわゆる傍観している幼児もいるが、なにかして遊びたいのだけれど自分のしたい遊びがみつからない幼児や、したい遊びの遊びかたがわからないため、ひとの遊びをみていようというような幼児が大部分である。だから、情緒の安定化をはかるためにいろいろな活動をしている幼児たちと、本質的にあまり差異がないといえる。

③ このことは、幼児の活動が、多くの種類の活動に平均してわかれていることや、活動の持続時間が、大部分の活動において二十分程度であり、きわめて短いことからいえる。

④ この中には、女児二人での「ままごと」や「ねんど」の活動のように、六十分以上も続いたものもあるが、このような活動はいずれも、幼児にとっては、情緒を安定化させる機能の多い活動である。そのために長い時間続いたということができよう。

⑤ これらのことからみると、五月の幼児のはじめてとりくむ活動は、一般的にみて、ほんとうにみずから選択したい活動がわからないため、したい活動がみつかるまで、手近なものを使って適当な遊びをしていようというような、いわゆる「ウォーミング・アップ」的な活動が多い。そして、これらの活動をしている間に、情緒が安定すれば、つぎの活動に移っていくというような状態である。だから、入園当初の四月においては、このような傾向はさらに著しいものと予想される。

(ii) 活動している中であそびの目標ができたり、はじめからしたい活動を選択してあそぶ

(七月〜十二月)

① 五月にみられたような結果に対して、七月から十二月の活動においては、手近なものを使ってのいろいろな種類の活動へ平均してわかれて遊ぶというようなことはみられず、それぞれの時期にみられる活動へ集中しやすい傾向を示している。

② また、これらの活動は、活動の持続時間からみても、五月に比して傾向としては長くなっているが、それとともに、持続時

間の最高と最低との幅も広がっている。

③ それは、幼児のはじめてとよりくむ活動が、この時期では、つぎの活動を選択する場合の準備的な活動としての、いわゆるウォーミング・アップ的な活動としてなされる場合と、それがそのまま長時間続けられて、幼児の一日の活動の主要な部分になってしまう場合と、両方の性格をもっているということによる。だから、どちらの側の活動がはじめてとよりくむ活動で主になるかは、その日のひとりひとりの幼児の状態や交友関係によってきまるということになる。

④ このことを活動の内容からみると、一般的にみて、*「構成的な素材による活動」*が男児により、また、*「絵画製作的な活動」*が女児により好まれていることからわかる。これらの活動は、情緒の安定化のためにもたいせつな活動であるが、ともに活動の変化にともなつて、幼児たちが自由に構成して発展させていくことのできる特性をもった活動である。つまり、はじめはこれらの素材による活動で情緒の安定化をはかり、ウォーミング・アップ的な活動をしているうちに、いつのまにか、その活動の中に幼児なりに目標ができて、ほんとうにそれに集中してとよりくむことになるのである。そのために、このような結果になったものと考えられる。もちろん、このような活動の中には、ウォーミング・アップの段階で終わる場合も多いのである。

⑤ ここでは、七月から十二月までをひとつのまとまりとしてみてきたが、これはあくまで、観察の結果を象徴化したため、実際にはその中にも、月ごとによる幼児の活動の発達が認められる。たとえば、七月には、幼児にとって情緒の安定化のためにもっともたいせつな、*「砂あそび」*や*「ねんど」*など、*「可塑的素材による活動」*の多いことに注目してよいであろう。

⑥ いずれにしても、この時期では、主として構成的な素材による活動、可塑的素材による活動、絵画製作的な活動を、ウォーミング・アップ的な活動としているうちに、いつの間にか、活動の目標ができて、ほんとうにしたい活動へ集中できるようになるのである。そのために、前述の素材を、幼児の活動の発展という面からも、じゅうぶん用意しておいてやる必要があろうし、活動が発展するように援助してやることもたいせつである。

そのようなことをしているうちに、しだいに「したい活動を選択」し、はじめからとよりくむことができるようになるのである。

(iii) はじめから目標をきめて活動する (二月)

① 二月になると、ひとりひとりの幼児が活動の目標をしっかりとつよようになつてくるので、はじめてとよりくむ活動から、その目標に向かってしんげんにとりくんていこうという傾向が強くなる。

② したがって、いわゆるウォーミング・アップ的な活動の必要性はあまりみられなくなってくる。それは、参加人員の多い活動の持続時間が長くなっていることからみられる。

③ この時期になると、幼児の活動が、昨日、今日、明日という時間の連続の中ではつきりなされる。もちろん、前の時期（七月から十二月）でも、このような活動の連続はあるが、しばしば偶然性に支配されることも多い。だから、幼児が登園して実際の活動をしてみなければ活動の予想のつかないことが多いのである。もちろん、このような傾向も、七月、十月、十二月と、観察のたびごとに減少している。

④ しかし、この時期では、昨日の活動の連続として今日の活動がなされるので、幼児は、はじめから目標をきめて活動することができし、それが明日の活動へと連続していくのである。

⑤ そのためには、幼児が活動を連続させることの可能になるような指導や環境設定が必要である。だから、保育者の指示したある程度長期にわたる目標についても理解して行動することや、友だちどうしで相談した計画に従って、役割を分担して行動することもできるようになる。

(3) 幼児のはじめてとりくんだ活動の集団の

大きさと持続時間

第二表 幼児のはじめてとりくんだ活動の集団の大きさと持続時間

	集団の大きさ	持続時間
5月	4.7 (2.0)	26.3 (17.8)
7月	7.2 (1.4)	47.6 (12.3)
10月	5.1 (1.6)	30.9 (19.0)
12月	5.9 (2.3)	42.5 (16.6)
2月	9.3 (4.0)	54.5 (26.2)

註 ()内は標準偏差を示す

つぎに、幼児のはじめてとりくんだ活動について、全体的にみて、幼児はどれぐらいの集団に参加して活動したか、また、それぞれの活動の持続時間はどの程度かということにつ

いてみていくことにする。そこで、これらについての算術平均と標準偏差を示すと第二表のようになる。

(i)

幼児のはじめてとりくむ活動では、五人ぐらいの友だちと遊ぶ

① 第二表の結果からすぐに気つくことは、二月を除いて、ほとんどの場合、幼児のいっしょに活動する友だちの数は、平均して五人前後であるということである。

② もちろん、この数は、集団としての目標がはっきりとして、役割が分化したりして、まとまって集団行動ができるという、いわゆる集団の質を示している数ではないが、しかし、五人前後の集団で幼児が安定するということは、幼児の集団を構成す

る場合に多くの示唆を与えているだろう。

③ つまり、いろいろな環境を設定するような場合には、このような五人ぐらいのグループを単位として、前日の幼児の活動をもとに、幼児の活動の発達にみあった素材をそれぞれのコーナーに用意しておいてやるのが、一般的にみてもっとも妥当であるということになるのではないかと思われる。

(ii)

幼児のはじめてとりくむ活動の持続時間はしだいに長くなり、終わりには、ひとつの活動に一時間ぐらいは集中できる

① つぎに、幼児のはじめてとりくむ活動の持続時間についてみていくと、平均して、はじめは二十五分ぐらい（五月）であったのが、終わりには一時間（二月）ぐらいになってきている。

② このことは、幼児の集中して活動にとりくむことの可能な時間が、きわめて急速に発達していくことを示している。

③ このような、幼児が集中して活動にとりくめるための、一日の生活のリズムをじゅうぶん考えてやることの必要性をきわめて端的に示している。

④ そのためには、幼児が自己をじゅうぶんに表現することができるように、幼児にじゅうぶんな時間を与えてやらねばいけないことについては、いまさらいう必要はないであろう。

(4) 幼児のはじめてとりくむ活動についての

指導上の留意点

これまで、幼児のはじめてとりくむ活動についての観察の結果を、発達を中心としてみてきたが、これらのことからいえる指導上の留意点を、以下簡単にまとめてみよう。

① まず、入園当初においては、幼児のはじめてとりくむ活動は、情緒の安定化のためにとりくむ活動が大部分であり、そのため、手近なものを手あたりしだいそのまま使っている活動が多い。しかし、幼児はこのような活動を通して、情緒の安定化をはかっていくし、いろいろな園にある環境にもなじんでいくのである。また、その中で、どのような遊び方をしたらよいかということや、いろいろな環境や教材のもっている特性をもつかんできていく。そのため保育者は、いろいろな環境を、幼児の活動をみてじゅうぶんに用意しておく必要がある。

② また、当然のことであるが、はじめは活動の持続時間は短いので、これを長くしようとして性急にそのことを解決するということは、幼児の発達を無視した指導をしたということになる。そのためには、ひとりひとりの幼児に、時間をじゅうぶん与えてやることの方がたいせつである。やがて、集中して活動にとりくむことができるようになるのである。

入園当初は、幼児のはじめてとりくむ活動は、当然つぎの活動へのウォーミング・アップであるが、もっと広く、幼児の活動全体も、これからの園の生活がじゅうぶんできるための、たいせつなウォーミング・アップの時期であるということ念頭に置いて、あせらずに幼児との人間関係を深めていくべきであろう。極端ない方をすれば、活動の質や活動の発達ということより、どうして活動にとりくもうかという、幼児の自己をじゅうぶん表現していこうとする態度を育ててやるのが、入園当初においてはもっともたいせつなことである。

③ 幼児の情緒の安定のために、きわめて素朴な素材が役に立つようである。積み木などを中心とする構造的素材や、砂やねんどなどの可塑的素材による活動、絵画やがらくたなどを使った製作的な活動は、幼児のもっとも好んでする活動である。幼児はこのような素材を使ってあそんでいるうちに、ほんとうの自分のしたい活動をみつげるだろうし、情緒の安定化をはかるだろうし、活動に集中してとりくめるようになっていく。

これらの素材による活動は、幼児にとっては、ウォーミング・アップ的活動であるときもあるし、目標をもってほんとうにとりくみたい活動であるときもある。それとともに、この両面を同時に満足させることのできる活動でもある。保育者は、このような素材を使って、登園したらずに活動できるよう、じゅうぶんに

コーナーなどによる環境として準備しておいてやる必要がある。このような環境が、登園した幼児たちにはじゅうぶん与えられないと、幼児たちは、集中してじゅうぶんに自己を表現するということを、いつまでたってもしないという結果にもなりかねない。このような素材は、幼児のはじめてとりくむ活動の中で、一年中を通して、もっとも重要なものであるということが出来る。

④ しかも、幼児は平均して五人ぐらいのグループで安定して活動する傾向が強いので、環境を設定する場合、このようなグループの大きさを考えて、前日の幼児の活動をもとにして見おとされるいろいろなコーナーを用意しておいてやることは、幼児のはじめてとりくむ活動にとつてはとてたいせつなことである。それによって、幼児のはじめてとりくむ活動や一日の活動の質が決まらせる場合も少なくないのである。

⑤ また、幼児が自己をじゅうぶんに表現できるように、はじめてとりくむ活動が、その日の幼児にとつてはたいせつな活動になる。そのためには、時間をじゅうぶんに与えて、安心して活動にとりくめるようにしてやるのがたいせつである。五歳児では、一時間ぐらいは集中して活動できるようになるのだから。

次号では、「幼児の一日の活動の変化」についてみていくことにする。

(納屋幼稚園)

(註資料として日本保育学会第二十二回大会発表論文抄録を参照していただきたい)